跡見との奇縁

田中倫郎

私が跡見学園女子大学に奉職したのは、昭和四十年の開学のときである。はじめの二年間は非常勤講師として勤め、四十二年から専任となったわけであるが、勤めはじめてまもなく、伊藤嘉夫学監と話しあっているとき、私がなに気なく、中学生のとき風船爆弾をつくっていた話をすると、伊藤さんの顔色がパッと明るくなった。「それは奇縁ですね。跡見の子たちも風船爆弾をつくっていたんですよ」その言葉を聞いて、今度は私の顔色が変わった。「そうか……あのときの女学生たちが跡見の生徒だったのか……」

昭和十八年の四月、私は都立一中（現在の日比谷高校）に入学した。二年生になった昭和十九年から学徒動員令が発令されて、同年秋から有楽座（帝国ホテルの真前の、現在の芸術座、みゆき座となっているところにあった劇場）での風船爆弾製造に従事させられることとなった。

風船爆弾というのは、日本独特の和紙を幾重にもコンニャク糊で貼りあわせ、直径十メートルばかりの気球にして、砂袋や火薬を綱で吊るし、水素ガスをつめて成層圏に打ち上げ、偏西ジェット気流に乗せて北米大陸の上空で、爆弾を落とす仕掛けになっており、モンタナ、ワイオミング、オレゴン、アラスカ、カナダなどで、落下した気球が発見されている。オレゴン州では六名のアメリカ市民がこの爆弾のため死亡し、第二次世界大戦中、敵の攻撃でアメリカ市民が犠牲になった唯一の例となっている。

日比谷界隈で風船爆弾に関係する仕事をしていたのは、有楽座と宝塚劇場と日劇の三者で、劇場が使われたのは、実験的に風船をふくらませる空間が必要とされたからである。

太平洋戦争が始まる前、エノケンや古川ロッパの喜劇を

家族で見に行ったことのある有楽座は私にとってなじみの劇場であり、そこの三階の元食堂で、のちに美術批評家となる東野芳明などと並んで、私たちは気球に火薬などを吊るマニラ麻の綱を縒りあげていた。休み時間には、コンニャク屋のオッチャンたちから「ヨイトマケの唄」やその他卑猥な唄をおそわったり、昼休みには日比谷公園へ出て「水雷、艦長」をやったりして遊山気分もただよっていたのは事実である。

ある日、私は連絡員としてせまい通りひとつへだてた宝塚劇場へ行ってくるように配属陸軍将校に命じられた。言われたとおりその劇場にはいった私は一驚した。そこでは女学生たちが大勢球体成型の仕事をしており、その場の雰囲気が野郎ばかりの有楽座とは違ってふんわりとしているのである。もちろんそのときの私には、それがどこの学校の生徒か知るよしもなかったが、伊藤先生の話で跡見の生徒（四年生）だったと判明したのである。

私たちの一年上の三年生は、赤坂の都立一中の校舎で和紙製砂袋の製造に従事していたが、その殺風景な空気の中で、有楽座に行った二年生たちを「近くに女子学生もいて楽しそうなのに」とうらやむ声があがったのも無理からぬところである。

だが年が明けて昭和二十年となると、日本の敗勢は日ましに濃厚となり、米軍の空襲は激化の一途をたどる。一月二十七日にはB29約80機が午後二時すぎ、日比谷から銀座一帯を空襲した。いわゆる銀座空襲である。そのときの一発が有楽座の隣の山水楼という高級料亭を直撃した。そこで紙の配給に関する会議を開いていた陸海軍の将校たちは全員死亡した。隣の有楽座の地下室に待避していた私たちはものすごい衝撃を感じ、舞台裏には大穴が開いたが死傷者は出なかった。

この一文を草するため、私は跡見の中学高校に残る資料に当たってみたいという気を起こして、資料部の中野一夫先生と非常勤講師の板谷春子先生の手を煩わすこととなったが、両氏のおかげで、単なる年譜だけではうかがい知れぬ具体的知識を得ることができた。たとえば、銀座空襲で跡見の生徒から犠牲者が出たことについて、昨年十月中央公論出版から出た『写真で見る跡見学園の歩み』には「本校四年生生徒、勤労動員工場よりの帰途、有楽町駅附近に

て二名が爆弾により即死、二名が重傷、内一名が病院で死亡」とあり、宝塚劇場に通っていた生徒と思わせる記事が出ているが、板谷先生の手記『私の体験した戦時下の跡見学園』（平成七年）には「四年生の学校工場の生徒四名が日比谷宝塚劇場の軍需工場で働く同級生を訪問する途中、空襲に遭遇」とあり、被爆者は跡見本校から日比谷へむかった生徒であることが判明し、茗荷谷と銀座を結ぶ地下鉄などまだ通じていなかった状況が、三名の命とりになったという感慨を誘うのである。

宝塚劇場で跡見の生徒につきそっていたのは、中島芳子、井上幸子の両先生で、伊藤先生自身は、飯野保氏、上野秀鶴氏とともに、跡見の校舎の学校工場で働く五年生のつきそいの係となっていた。理研王子鋼材工場の作業を跡見の体育館に移し、昭和十九年五月から、海軍の戦闘機「雷電」の重機関砲弾倉の仕上げ工程に生徒たちは従事していたのだ。ここで跡見の子たちの繊細な神経がすばらしい成果を収める。伊藤先生が遺された手記『堅香子之花』から引用する。

「……出来上りについては、精密な検査が行われ、ある部分については〇・一パーセントの誤差も許されないのである。（中略）すべてが鉄の鋼板で、理研鋼材の工場に来るのは、多量生産の原型源品である。その仕上げにある微妙な誤差を正して仕上げる工程なのである。（中略）

仕上げられた弾倉は、海軍の工廠に納められるのである。ここでは厳しい点検が行われるのだ。しかし、跡見の学校工場における作業はほとんど抜群だった。家庭教育と学校教育があげた成果だと感動した。いくばくもなく、海軍の監督官が、専門軍需工場の責任者数人をつれて工場見学に来た。徴用工を主とする軍需工場で、全く同じ重機関砲の弾倉を仕上げているその工場では、跡見のこの工場の納品の数十倍の不良再作業の返品があって、この女子学生達の無返品に等しい成績を見ようというような意味だった。

係官から言葉を極めて賞讃されて、生徒たちは相抱いて泣いた」

この文章を読んだとき、自分の眼で見た、宝塚劇場で風船の球体成型にいそしんでいる跡見の生徒たちの真剣そのものの表情が自然に心にうかび、伊藤先生の感動がストレートにつたわってきた。

ここで話は昨年のことに飛ぶ。去年の夏、私は病妻をなくしたが、その後の経過の中で、跡見女子大の卒業生の方々の態度から、今まで述べてきた繊細さと一脈相通ずるものを感じてきた。

家内が亡くなったのは七月の中旬で、夏休みを控えた時期でもあり、公表は避けて葬儀も親族のみ集まって内々にすませたのである。ところがその知らせを伝え聞いた卒業生たち――第一期の方々、一紫会の役員、ずっとくだって最近退職された美学美術史学科研究室の助手の方々にいたるまで、多くの卒業生たちが、亡妻に香華を贈ってくださったり、男やもめを励ます会を開いたり――しかもそれをできるだけ目立たない形でおこなってくれる気くばりに痛く心を動かされたのであった。特に私を驚かせたのは、スキー部O・G会の副会長（第十四期生）が高崎から上京して、途中で浦和市在住の第六期生の先輩と落ち合い、二人して拙宅まで花束を届けてくれたことであった。家内が病気になってからの長いあいだ、スキー部顧問としての働きはほとんどなかったに等しい私は、亡妻の仏壇に手を合わす二人の姿を、不思議なものを見るような気もちで眺めていた。

昨年の十一月末、学生委員の一員として茗渓会館での就職懇談会に参加した私は、その席で挨拶に立った株式会社エトワールの人事部長、有賀俊文氏が「跡見の出身者には、男女共学の大学出の女性とはひと味違った女らしさがある」と語るのを聞いて、実感をこめながらうなずいた次第である。

こうして、風船爆弾が仲立ちとなった跡見と私との結びつきは、卒業生の方々のこまやかな心くばりを介して私の心の中では「合縁奇縁」という言葉に定着し、退職後の思い出をやわらかく色どってくれることであろう。感謝をこめてペンを擱く。